

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(60)**古写真「明治時代の園児」**

明治18(1885)年に開園した土浦幼稚園の園児と保母^{ほぼ}の集合写真です。100名を超える園児のほとんどは着物姿ですが、一部に洋服姿の子、エプロンを身につけた子、帽子を持った子供の姿も見られます。背景の平屋の瓦葺きの建物は、明治20年に小学校の校舎の隣に建てられた園舎と思われます。

【情報ライブラリー検索キーワード「学校」】

博物館からのお知らせ**★★テーマ展「土浦道中絵図―描かれた水戸道中―」★★**

9月7日(土)~10月20日(日)

「土浦道中絵図」をとおして、18世紀中頃の水戸道中の姿を紹介します。

あわせて、この道の機能や通行を支えた人々、地域の様相にも迫ります。

○ギャラリートークを開催します

10月20日(日)午前10時~午後2時~(いずれも30分程度)

★★特別公開「土屋家の刀剣―国宝・重要文化財の公開―」★★

10月26日(土)~11月17日(日)

土浦藩土屋家に伝わった刀剣のうち、国指定重要文化財を特別公開します。

★★土浦第二高等学校茶道部による呈茶を開催します★★

日 時: 11月3日(日・文化の日) 午後1時~3時

会 場: 当館 展示ホール

内 容: 特別公開「土屋家の刀剣」の記念イベントとして、抹茶を提供します。

定 員: 50名

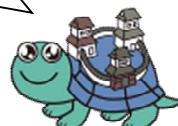
料 金: 200円

申込方法: 当日博物館受付にて(先着順)

★無料開館のお知らせ★

・11月3日(日・文化の日)

・11月13日(水・県民の日)



博物館マスコット
亀城かめくん

とうじょう じ きょうづか

東城寺経塚の再検討①

きょうづつ
— 経筒はどのように作られたのか —

12世紀、筑波山東南麓の「山ノ^{やまの}庄^{しょう}」の丘陵に、複数の経塚が築されました。経塚とは、末法思想のもとで釈迦^{しゃか}の教えを後世に伝えるため、経筒に經典類を納入し埋納^{まいのう}したものです。のちに「東城寺経塚群」と呼ばれる12基からなるこの経塚は、関東地方では有数の規模と古さを誇ります。明治24（1891）年に発見され、同35年に国内初となる経塚の学術調査が行われた遺跡としても知られています。東城寺経塚群の主要な資料は、現在、東京国立博物館の所蔵になっています。東城寺経塚群については、展示室だより『霞』でもたびたび紹介してきましたが、今回は当館がレプリカを製作し展示している保安3（1122）年の経筒（以下、「保安経筒」）について、とくに形態に注目してご紹介します。

保安経筒は高さ24.5cm、口径13.3cmを測ります。筒身上部の開口した部分に蓋を受けるための凸帯^{とつたい}の痕跡がみられますが、蓋^{ふた}は現存していません。

茨城県内出土の12世紀の経筒のうち、たとえば水戸市の神崎寺^{かみさき じ}経塚のものは、筒の側面の部分と底板を別に鑄造してはめ込んでいますが、保安経筒は筒から底まで一体に造り出しています。ただし、筒身の表面を観察すると、中程より下にやや盛り上がった部分があり、鑄継ぎをした痕跡がうかがえます。保安経筒を分析した原田一敏氏は、鑄造する際に湯流れが悪く筒身の下半分に穴などがあいたため、下半部を作り直し、上半部を埋^いけ込み再鑄造した可能性を指摘しています。

さて、保安経筒の側面には、毛彫りの文字が5行にわたって刻まれています。私見ですが、それらの文字は筒身を正置させたときに、全文をそのまま読み通せる（視認できる）範囲内に収めている点が、本経筒の特徴であると考えております。先にあげた神崎寺経塚の経筒では、銘文が筒身の内側にあらわれ、外側から読みとることができないのとは対照的です。そして、保安経筒の銘文の中央、すなわちその中心には、経筒を造営した平致幹^{たいらのむねもと}の名が配されています。蓋を被せても銘文は隠れることがなかったと推測されることから、保安経筒は平致幹がその威勢を示すことを意識して、銘文を「見せること」「読ませること」を念頭に製作させたのではないかと、そのように考えています（続く）。

（萩谷良太）

保安3年の経筒〔原資料は東京国立博物館所蔵、写真出典：ColBase
(<https://colbase.nich.go.jp/>)〕

参考：原田一敏「経塚の制作と地域性—東京国立博物館所蔵の紀年銘を有する作品を中心に—」『経塚が語る中世の世界』（思文閣 2008）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも古代コーナーに展示しています。
●東城寺経塚出土資料（当館所蔵）
●入ノ上遺跡出土品（当館所蔵）



土屋家より拝領したと伝わる脇指

—脇指 銘「めい 摂州住藤原國重せつしゅうじゅうふじわらのくにしげ」—

土浦市立博物館で所蔵する「土屋家刀剣」85振は、土浦藩主土屋家に伝来したとされています。このほかにも、土屋家では多くの刀剣を所蔵していましたが、親類のほか他の大名家への贈与や、家臣への下賜などによって手放したものが数多く存在します。今回はかつて土屋家で所蔵していた可能性があり、現在は個人が所蔵する1振を紹介します。

右の写真は、土屋家から下賜されたと伝わる脇指です。刃長（刃渡り）が50.3cm、反りは0.9cmと浅く、切先付近に反りがつく先反りの姿をしています。刃文は大乱で、互の目に丁子が交ざっています。地鉄は板目を基調として、ところどころ空目が入っています。茎には銘が刻まれており、差表に「摂州住藤」、差裏に「原國重」とあります。この脇指は本来もう少し長いものでしたが、寸法を短くする大磨上がなされました。この時に銘を残すべく、銘の部分を折り返したため、差表と差裏に銘が分かれているのです。この銘と、反りが浅く先反りの付いた姿から、江戸時代前期、特に寛文期（1661～73）頃の作品と判明します。作者の國重は江戸時代前期に活躍した刀鍛冶で、2代河内守国助の門人となりました。「摂州住國重」や「池田鬼神丸國重」などの銘を切った作品を残しています。

この脇指が伝来したのは、土浦藩士であった鳥羽家です。同家には脇指とともに、「鳥羽勝熊が小姓を務めていた時に土屋家から拝領した」という話も伝わっていました。土浦藩の藩士録「諸士年譜」（当館所蔵）によれば、鳥羽家は元々滝瀬を名乗っており、文化7（1810）年に2人扶持の禄を得て土屋家で召し抱えられました。同15年には、滝瀬滝右衛門は病で臥せっていた寿相院（土屋家7代当主英直室・8代当主寛直母）の側に仕えています。この功績が認められ、それまでの徒士から中小姓に昇格し、金7両3人扶持が与えられました。合わせて、それまでの滝瀬から今後は鳥羽を名乗るようにとも命じられています。この滝右衛門の孫が勝熊です。「土浦分限帳」（人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵）によれば、勝熊は慶応2（1866）年に若殿（のち土屋家11代当主挙直）の側仕えを命じられると、同4年には大殿（土屋家10代当主寅直）の側仕えも兼帯しています。記録に残っていないため判然としませんが、この頃に寅直または挙直から勝熊へ脇指が下賜された可能性があると考えられます。

（西口正隆）

脇指 銘「摂州住藤原國重」（個人所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。

- 諸士年譜（当館所蔵）
- 土浦分限帳（写真パネル・原資料は人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵）



関流大筒「拔山銃」とその名の由来

「拔山銃」は、関流砲術の祖、関之信（1596～1671）が近江国の国友丹波大掾 橋 宗俊に発注した 250 匁筒です。全長 130cm、口径 4.9cm、総重量 25kg、打ち出される弾丸の重量 1.8kg、射程距離 2.8km の性能は、大筒（大砲）の名に恥じぬ威力です。砲身の裏には「拔山銃」を使用した「町打」の記録が刻まれています。町打とは 10 町（およそ 1km）以上離れた的をねらう遠距離射撃です。「拔山銃」の裏銘には寛文 6（1666）年、之信の次男勝信が「拔山銃」で 22 町先の的を狙ったことが刻まれています。

さて、大筒「拔山銃」、大筒「谷神」はともに土浦市指定文化財です。「谷神」については、その名の由来を「万物を生み出す、深くて空虚なところ（谷）にひそむ不思議な力（神）」と紹介いたしました（「霞」16号）。今回は「拔山銃」の名をひも解いてみたいと思います。

「拔山銃」は銃身にその名が金象眼で施され、その下部に漢文が 2 行加えられています。読み下しで紹介しましょう。「勢いは石弩を押し、声は鉄閤を徹す、大いなるかなひとつの銃、万山を抜き倒す」。石弩とは、ばね仕掛けで石を発射する弓、鉄閤とは鉄の建物のことで、意識すると「（この銃の）勢いは石弓より段違いにすぐれ、発射音は鉄の御殿でさえも貫いて響く、ひとつの銃の力のなんと偉大なることよ、数々の山を抜き倒すほどだ」となるでしょうか。

この漢文から「拔山銃」は、「山をも抜き倒す」威力があるとして命名されたと推定されます。

人にだけでなく、モノに名をつけるのは西洋には見られない日本的な発想です。普段、特別なものとは考えずに用いている名ですが、日本人は名をつけることで魂が宿ると考えていました。漢字「命」に「いのち」と「なづける」のふたつの読み方があるのは、「なづける」ことで「いのち（魂）」が宿ると考えられていたからでしょう。

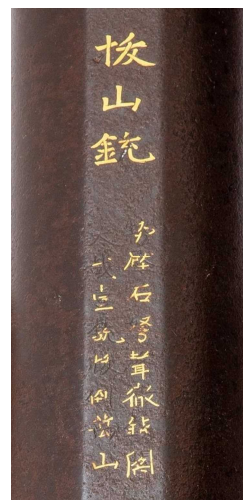
「拔山銃」の名を得て魂を吹き込まれた火縄銃は、之信が久留里藩（千葉県君津市）から土浦藩へと仕官先を転じたのちは、土浦藩関流砲術の大筒としてその姿を現在に伝えています。

（木塚久仁子）

大筒「拔山銃」（土浦市指定文化財 個人所蔵 江戸時代）

参考：『土浦市立博物館第五回特別展図録 火縄銃—関流砲術の牙えと奥義』（1990）

宇田川武久『江戸の砲術—継承される武芸—』（東洋書林 2000）



「拔山銃」部分拡大



大筒「拔山銃」（土浦市指定文化財 個人所蔵 江戸時代）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しています。

●大筒「谷神」（土浦市指定文化財 個人所蔵）

●関之信肖像（土浦市指定文化財 個人所蔵）



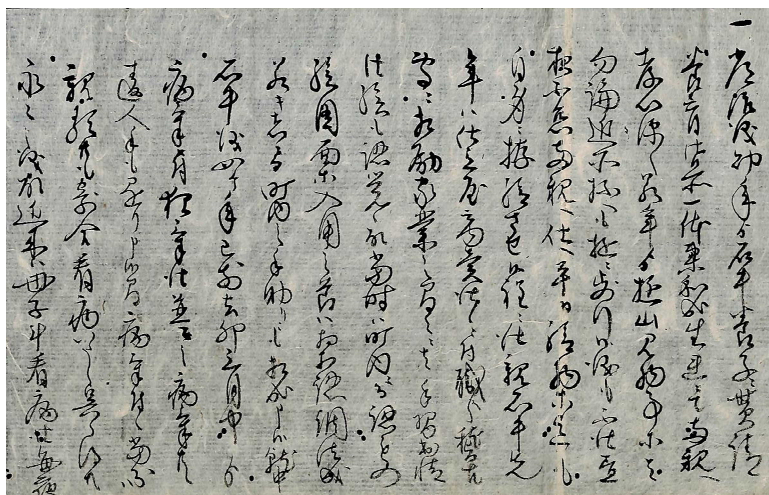
ぬまじりぼくせん
若き日の沼尻墨僊
—孝養推薦文—

江戸時代の後半、土浦で活躍した町人に沼尻墨僊（1775～1856）がいます。これまで「霞」では、墨僊が寺子屋の主人として町の教育を支え、地理や天文、文芸の分野でも業績を残したことを紹介してきました（「霞」7、17、25、34、52号、番外3号）。多才な人物として後世に伝わる墨僊ですが、実は、若き日の彼は藩から2度褒賞されています。今回は、1度目の褒賞時の記録から墨僊の人物像について考えたいと思います。

寛政10（1798）年7月22日、墨僊は、病気の養父石牛への孝行により、養母いさとともに藩から褒賞を受けました（「墨僊居士遺稿」）。この褒賞は、町の人びとから推薦を受ける形で実現します。まず、石牛の隣家や中城町（中央一丁目）の町内惣代らが名主・年寄に対し、墨僊母子の善行を報告し、奉行所への披露を依頼します。これを受け、年寄と名主は、その旨奉行所に取り次ぐとともに、墨僊の善行は町の若者たちの励みになるとして、褒賞を推薦しています。

本史料は、名主・年寄から奉行所に提出された墨僊母子褒賞の推薦状です。母子の孝行が、近隣の人びとから町の運営を担う町役人、そして町政を預かる奉行所へと伝わり、褒賞が実現したことがわかります。

江戸時代の後半、社会秩序の動揺を背景とした民衆教化策の一環として、領主は領民の善行をさかんに褒賞するようになります。寛政期（1789～1801）、幕府は各地の褒賞事例を集め、その主だったものを享和元（1801）年に『官刻孝義録』として刊行します。続く文化期（1804～18）にも事例の収集が行われ、その成果は嘉永元（1848）年に『続編孝義録 料』にまとめられました。この2つの記録によると、土浦藩領でも宝暦期（1751～64）から文化期にかけて、墨僊を含む79名が褒賞されています。



孝養推薦文（個人所蔵 寛政10年7月）

家業のかたわら養父を看病し、町の手助けもする墨僊は、周囲の人びとにとって奇特で頼もしい若者だったことでしょう。他方で、この時期の領主は財政難などにより、自らの統治の正当性を支える「御救」の遂行が困難となり、民衆の教化を通じて社会の安定を図ろうと考えました。領主にとっても、墨僊の孝行は人びとのお手本としてふさわしい行為だったといえます。孝子として記録に残る墨僊像は、本人の行いに加え、社会の動向や領主にとっての理想的な領民像に規定され、形づくられていったのではないのでしょうか。

（井上 翼）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しています。

- 「墨僊居士遺稿」（個人所蔵）
- 「寺子屋教育の功により一ヶ年米五俵下賜につき一札」（個人所蔵）



ねがいしょ 入園願書と退園願 —土浦幼稚園最初の入園児—

土浦市立認定こども園土浦幼稚園が開園してから、令和6年10月で1年が経とうとしています。今回は土浦幼稚園の草創期を振り返ってみたいと思います。

日本の幼稚園教育は、明治9（1876）年の東京女子師範学校附属幼稚園の創設によって始まりましたが、幼稚園の設置はなかなか進みませんでした。しかし、土浦では明治18年1月に土浦西小学校、土浦東小学校、土浦女子小学校の3校の校長として招聘された坂本佑一郎を中心に、幼稚園の開設が計画されました。着任後早々に東京女子師範学校附属幼稚園を参観し、感銘を受けた坂本は、戸長と学務委員に幼稚園の必要性を説き賛同を得ました。急ぎ開園準備が進められ、6月には男女満4歳以上満6歳以下の園児30名を募集し、9月に仮開園しています。最初の入園児は、太田きよ・奥井たみ・関重信・尾形平三郎・進士莞爾・町田文一の6名で、商家や元土浦藩士の子供たちでした。このうち商家生まれの尾形平三郎の入園願書と退園願が残されています。

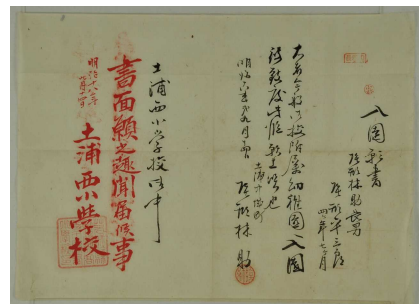
平三郎は中城町（中央一丁目）の呉服商尾形林助の長男で、当時ちょうど入園に適した4歳7か月でした。入園願書（写真①）は9月14日に土浦西小学校へ提出されています。父林助は真壁郡吉田村（筑西市）の出身で、尾形家の長女とみの婿養子となり、5代尾形徳兵衛を継ぎました。尾形家では、江戸時代は娘に商才のある婿を迎え、家業を支えていました。林助は町の副戸長や小学校の世話役等の公の仕事も務め、教育をすすめる立場でもありました。また、母とみは10歳で沼尻墨僊が開いた塾「天章堂」に入門して学んでいます。商家にとって、読み・書き・そろばんは必須の素養でした。小学校に入学できる年齢になった平三郎を退園させたいという退園願は、明治20年7月に提出され、許されています（写真②）。7月に退園するのは、当時小学校が9月入学だったからです。

開園当初の保育料は明らかではありませんが、明治19年4月に1か月の保育料は6銭に減額され、その甲斐あって同年末には園児数は53名に増えました。その後保育料は等級が設けられ増額しましたが、多い時には100名を超え、幼稚園の存在は定着していきました。

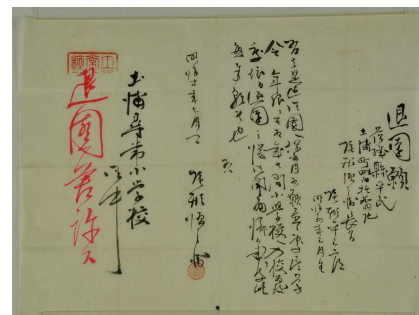
その後、13歳のとき父林助が43歳で亡くなり、平三郎が6代徳兵衛を継ぎました。若き当主を母とみが支え、呉服商は継続されます。母子の人間形成の土台には、幼少期の教育があったのではないかと考えています。（野田礼子）

参考：永野絵里「土浦商家大国屋徳兵衛家の女性—手習本に見るその矚と教育—」（『土浦市立博物館紀要第9号』1999）

是澤博昭・湯川嘉津美「土浦西小学校附属幼稚園の設立」（『土浦市立博物館紀要第11号』2001）



写真①入園願書（個人所蔵）



写真②退園願（個人所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
近世・近代コーナーに展示しています。

- 天章堂墨僊居士遠行以後入門簿（個人所蔵）
- 土浦尋常小学校沿革誌備考（土浦市立土浦小学校所蔵）
- 入学証（尾形平三郎）（個人所蔵）



市史編さんだより

とうしん やまね はち か そん
灯心をめぐる山根八ヶ村と灯心問屋の関係―文政期の一件史料をひも解く―

近代以前における照明は、行灯や蠟燭といった火を使用したものでした。灯心はその火をともし粗い紐状のもので、照明に必要不可欠なものでした。

灯心は藺草を加工したのですが、現在の土浦市域は、江戸時代頃から灯心用の藺草生産が盛んでした。宝永2(1705)年には、幕府が藺草生産を行う地域を限定しました。そのひとつが「山根八ヶ村」(土浦市真鍋、上坂田、下坂田、大畑、藤沢、高岡、田土部、つくば市大形)と呼ばれる土浦藩領の村々です。

山根八ヶ村が生産・加工した藺草・灯心は、江戸に運ばれ消費されました。山根八ヶ村は、宝永期(1704～1711)以後、享保8(1723)年までは、江戸の弾左衛門に藺草を売り渡していましたが、享保9年頃から江戸の蠟燭屋に灯心を売り渡すようになります。また、取引に際して蠟燭屋が「灯心問屋」を設け、山根八ヶ村における灯心の仲買を介して一手に買い取るができる体制になりました。今回紹介する史料は、山根八ヶ村の仲間内で起きた灯心問屋と蠟燭屋への対応をめぐる文政期(1818～1830)の一件についてです。

事の始まりは、田土部村の倉右衛門の倅官治が山根八ヶ村の惣代(リーダー)に相談なく、灯心問屋を訴えようとしたことから始まります。しかし、山根八ヶ村の惣代や田土部村の百姓たちは官治の勝手な行いに驚き阻止しようとした。

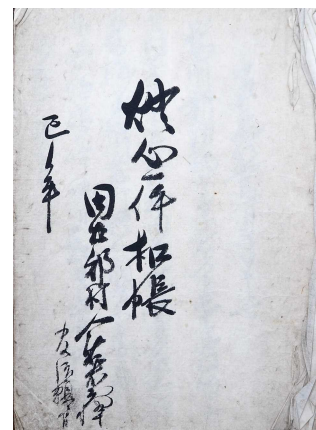
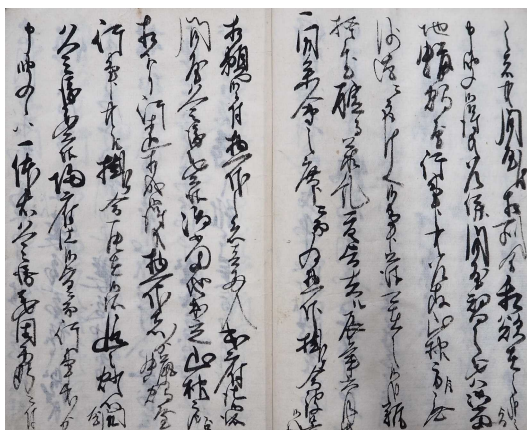
官治は、なぜ灯心問屋を訴えようとしたのでしょうか。官治の言い分を山根八ヶ村の惣代は次のように説明しています。「長く灯心問屋をつとめていた伊勢屋久兵衛が山根八ヶ村に相談なく問屋を辞めてしまったうえに、近頃仲買人と結託しているのではないかと噂が入ってきた。官治は灯心の販売価格について灯心問屋や蠟燭屋にも不信感を抱いており、山根八ヶ村の便宜を主張するべく、私たち(惣代)と話し合う前に、自ら灯心問屋の久兵衛を訴えたようだ」。

官治の勝手な行いは、山根八ヶ村の惣代とそうではない村々との情報共有の不足、つまり運営体制が不十分なことが一つの要因だったようです。また、山根八ヶ村と仲買、蠟燭屋、灯心問屋それぞれに潜在する利害関係から訴訟の火種が生まれていたことがうかがえます。

灯心は、生産地である山根八ヶ村だけでなく仲買人や問屋にも大きな利益を生み出すもので、それをめぐって訴訟もたびたび起こりました。

(石原千尋)

参考：井上準之助『近世農村産業史論』(明石書店 1980)



「灯心一件控帳」(田土部村倉右衛門倅官治願いの件他につき)(個人所蔵)

霞 短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今年の博物館再開館の際、修復したリードオルガンを演奏していただいた森浩孝様から、当時の所感について述べて頂きました。

60年の時空を超えた声（リードオルガン）を聴く

2024年1月6日、約1年半の改修工事を終えた土浦市立博物館が「土浦のたからもの」と題した特別展の開催とともにオープンしました。

その中に、旧土浦市立土浦幼稚園にて昭和初期から戦中戦後を経るまで、「声」を出し続けていた「リードオルガン」が修復され演奏可能となつて姿を現しました。

このオルガンがどのような経緯で博物館の所蔵となり、どのような修復がされたのかは、博物館見学に来られた際に、ぜひとも学芸員にお尋ねください。時空を超えたドラマティックな話に触れられると思います。

本稿では、60年ぶりに「声」を出せるようになった「リードオルガン」と私の出会いについて語らせていただきます。

学芸員から博物館リニューアルオープンのイベントで、修復したオルガンの演奏会を行いたいと連絡を受け、2023年の夏、工事中であった博物館の収蔵庫でオルガンと出会いました。

早速、11個の「ストップ」のon-off、ふいごのペダルを踏み、鍵盤をタッチすると、とても柔らかな「声」を発してくれました。鍵盤の反応、ストップの機械的なエフェクト（高音部と低音部の各リードセットの選択、オクターブキー、ワウペダルなど）に多少難があるものの、弾いていけば馴染んでくると思われ、私は演奏をお引き受けしました。

さて「リード」とは、クラリネットやサクソフォン、草笛のように、振動させる発音部のこと。人の声帯も振動させています。演奏会当日も、修復したリードオルガンは「柔らかな声」で私たちに語りかけてくれました。

博物館には、旧土浦幼稚園で使われていた数多くのピアノ楽譜、古今聖歌集、童謡唱歌集も所蔵されています。いつしか、これらのものも、一緒に展示されることがあれば、「60年の時空を超えて、取り戻した声」で、さらに誕生した時からの昔語りを、私たちに聴かせてくれることでしょう。

（土浦聖バルナバ教会所属オルガニスト 森浩孝）

コラム（60） 博物館実習の現場に立ち会って

8月20日（火）から25日（日）にかけて、当館と上高津貝塚ふるさと歴史の広場で博物館実習生の受け入れが行われました。

博物館実習は、大学での学芸員資格取得のため、博物館法施行規則により単位の習得が定められた「博物館に関する科目」の1つです。学生にとっては、現場で仕事を体験する機会となります。実習内容は多岐にわたりますが、私は刀剣の手入れと資料整理の場に立会いました。

実習への立会いは、自分自身の学習になると同時に、かつての自分の実習への向き合い方を顧みる機会となりました。九州各地の博物館をめぐり、メモを片手に、各館の独自性や特徴を考えながら注意深く館内や展示を見学したこと。展示企画とチラシ作成のグループワークで、意見や知恵を出し合いながら、自然な展示構成と目を引くチラシのデザインを考えたこと。いずれも楽しみながら主体的に取り組んでいたのが思い出されます。

学芸員1年目の現在、業務の幅広さや覚えることの多さにとまどうことも多々ありますが、学生時代同様、何事も楽しむ姿勢を大切に日々を過ごしたいと思います。

（井上 翼）

情報ライブラリー更新状況

【2024・10・1現在の登録数】

古写真 605点（+1）

絵葉書 514点（+0）

※（ ）内は2024年7月2日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を随時追加・更新しております。1ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2024年度

秋季展示室だより（通巻第60号）

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2024年度秋季展示は、2024年10月1日（火）～12月27日（金）となります。「霞」2024年度冬季展示室だより（通巻第61号）は2025年1月5日（日）発行予定です。次回の来館もお待ちしております。